

心が壊れた少年と少女

Narvi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖怪とは一般的に動物や植物が自我を持った生物だ。何者かに対する狂気じみた気持ちだが、それを妖怪へと至らせる。

人間から妖怪へとなる場合もあるが、それは殆どの場合何千年、何万年もの月日がかかる。考えられないほどの憎悪でも隠し持っていない限り、記憶が残っているということは極々稀である。

これは、人里で平穏に暮らす少年——楓が里外で横たわっている一匹の狼を見つけたことから始まる、可哀想なお話。

もしも少年が狼を見つけていなければ、彼の人生はもつと真つ当なものだっただろ

目次

第一話	妖怪疑惑	1
第二話	会えない	8
第三話	妖怪との出会い	15
第四話	似た者同士	19

第一話 妖怪疑惑

——夢を見ていた。

記憶に残つてない時点で実際には見ていないのかもしれないけれど、なぜかそんな感覚がしたのだ。

起き抜けの体はどこかふわつとしてるし、頭も覚醒していないからか少しぼーつとしている。

とにかく僕は何とも言えない不思議な感覚を抱いて目を覚ましたのだ。

あたりは薄暗く、寝起きの目ではよく見えない。でも、耳に届いてくる草木の揺れる音や体に吹き付けてくる風から、外にいるということがはわかった。

はて、僕はいつの間に眠ってしまったのだろうか？

寝る前のことを思い出してみようにも周りの情景がよく見えなかったため、思い出すきっかけがない。

この暗さからみて時刻はきつと六時から八時ほどだろう。頭上にぼっかりと浮かぶ月が、唯一の光源として鈍く照らしていた。

「……は……ご……だ……ら……う……」

取り敢えず声に出してみた。当然、それに応えるものは誰一人いなかった。

それもそのはず。この不規則に生える木々や、月に照らされて見えるようになった縄張りを主張するための爪あと。

それは、ここが森の中だということを強く知らしめていた。

そこで、僕は思う。

何故僕はこんなところにまで来てしまったのだろう。

元々、人里に住む者は基本その場所から出るような馬鹿な真似はしない。

そんなことをすれば漏れ無く妖怪の餌である。そうしてしまった妖怪も結局は今代の博霊の巫女によって始末されるのだが、妖怪の撲滅のために人間自ら命を差し出す者はいないだろう。それは本末転倒である。

とにかく、人里の中にさえいければ安全で安定した生活を送られるということは、大きな出来事でもない限り約束されたものである。

だから普段は人里の外になど滅多に出ないのだが。そこまで考えて、ふと思いついた。

「そうだ！ 狼を埋めようとして……」

たまたま人里の外を見てみると、遠くで灰色の狼が横たわっていたのだ。

妖怪にでもやられたのか、それとも寿命を迎えたのか。それは定かではないが、そこ

で放置しておくのは可哀想だと思ったのでせめて埋めてやろうと思いついたのだ。」「だとしても中に入り過ぎだよな……」

確か狼を埋めたのは森の入り口あたりだったはずだ。

もちろんそんなに奥まで入ったつもりはなく、すぐ思い出せるように少し大きめの木の下に埋めたはずだったのだが。

「まあいいか」

しかし考えていても仕方がない。

奇跡に近いが、眠っていた間妖怪に襲われていたわけでもなくピンピンしている。狼を埋め終わっているのだから、この森には用はない。

妖怪に見つかっては困る。急いで帰ろうと僕は暗い森のなかを走った。

少し眠っていたからだろうか。元気になった体は、不思議といつよりも早く走れているような気がした。

走ること数分。森の中に入ってしまっていたものの、別段最奥の方にいたというわけではなかったらしい。

妖怪と遭遇すること無く森から出ることが出来た僕は、少しの明かりで照らされてい

る人里の方へと歩き始めた。

ここまで来たのならもう一安心だ。人里は目前で、何かあれば妖怪から人里を守っている門番の人が駆けつけてくれるだろう。

僕は美しく輝いている夜空の星々を眺めながら人里へと向かった。

——だがしかし、入ることは叶わなかった。

目の前には人里が広がっている。僕は門番に声をかけた。

「あのおう、すみません」

僕がそう言うと、何故か四人の門番が一斉に刀を抜いた。

「……………え？」

おかしい。

何故彼らは刀を抜いたのだろうか。後ろを見てみても、そこには妖怪どころか動物一匹いなかった。

向き直ってみても、門番は変わらず刀を抜いたままである。全く納刀する気配はなく、門番の間ではピリピリとした雰囲気漂っているのがわかる。

「なんで……………」

なんで彼らは全員。

——僕を見ているのだろうか？

「貴様のようなものがここに何のようだッ!!」

その張り上げた声に思わずビクツとしてしまった。

「ぼ、ぼくですか……?」

「貴様以外に誰がいるというのだ!」

門番は未だ怒気のこもった声でしゃべり続けている。そして、人里を守る門番達はどうとう僕に対して刀を向けた。僕は怖くなったたじろいだ。

「えつと……た、ただ人里に、帰ろうとしてただけなんですけど……」

何とか振り絞ってやっと出来た発言だったが、それを聞いた門番は皆が笑っていた。そんな門番に僕はただ啞然とすることしか出来なかった。ひとしきり笑い終えた門番達だったが、今度は衝撃の発言が飛んできた。

「ふんっ。貴様が何を言いたいのかは知らないが、貴様のような妖怪を人里に入れるわけがなからう」

「……妖怪?」

「当たり前だろう。貴様みたいな白狼天狗に、人里の地を歩かせるわけにはいかない。今なら見逃してやろう。さっさと立ち去れ」

門番の表情は大真面目で、決して嘘を付いているようには見えなかった。しかし、そ

の突拍子のない発言に、僕は思考が追いつかなくなってしまうていた。

僕を妖怪と間違えるとは、門番はどうかしたのだろうか。

僕はもちろん妖怪なんかではなく、列記とした人間である。特別な力も、化け物じみた身体能力も持っていない。至って普通の男の子だ。

しかし、彼ら門番の言葉はなぜか真に迫っていて、僕はどうしようもなく怖くなっていた。

「僕は楓と言います。何を勘違いしているのかはわかりませんが、人間です！」

「貴様……もしや人間に化けて人里を荒らそうとしているのだな……」

「い、いや！ そんなことありません！ 信じてくださいッ！」

「最早聞く耳持たぬわ！ 人間の里に足を踏み入れようとはいいい度胸だ……ここで成敗してくれるッ！」

名乗ってみても意味をなさず、むしろ痛に障ったようで門番は一斉に刀を持って向かってきた。

急な行動に戸惑ってしまい、逃げるのが遅れてしまった。

「ぐううー！」

一人の門番の刀が僕の右肩を斬り裂いた。その燃えるような痛みには僕は悶絶した。自然と目には涙が浮かんでくる。しかしそれを流している暇はなかった。

「くそッ！　なんでだよッ！」

苛立ちと共に、僕はその場に背を向け走りだした。何が起こっているのか検討もつかないが、今はこうするしかなかった。

浮かんでいた涙を置き去りにして、ただ闇雲に夜道を走り続けた。

第二話 会えない

無我夢中に走り続けた。

そんなことをしても先ほど起きたことがなかったことにはならない。それでも走っていないとどうにかなってしまいそうだった。

気づいた時には、周りを木に囲まれていた。無意識のうちに戻ってきてしまっていたのだろう。ここは一匹の狼を埋めた場所——僕が目が覚めた場所だ。

倒れ伏していた狼を可哀想だと思い、人里を出て狼を森のなかに埋める。そしてやることを終えたら何をすることもなく、人里に帰る。たったそれだけのことだったのだ。

——本来は、だが。

「なんでこんなこと……！」

理由はわからないが、白狼天狗に間違えられてしまった。妖怪と人間はどれだけ月日が経とうとも相寄れることはないのだろう。この現状を何とかしないことには、恐らく僕は人里に帰ることは出来ない。

「はあ……！」

まだ幼い自分の妹を思い浮かべて、一つ深いため息を吐いた。僕がどこかへ行こうとするといつも僕の数歩後ろをとととと一生涯懸命に付いて来る、可愛い自慢の妹。

でも、会えない。この状況を改善できなければ、そんな妹とも一生会うことが出来ない。しかし、どうすれば良いのだろうか。どうすれば人里の中に戻ることができるのだろうか。

ひとまず家に帰るということを後回しにし、何故自分が人里に入ることが出来ないのかを考えてみる。

「門番は僕を妖怪って言ってたけど……。僕は人間だしなあ……」

唐突に人間だった者が妖怪になることはない。例外として吸血鬼がいるが、それは人間に対して吸血行動を取らなければならなかったため、それに準ずる行為や現象をされた記憶はないので却下だ。

そもそも僕は白狼天狗と間違えられている。白狼天狗にそういった習性があるとは生まれてこの方聞いたことはなかった。

「……僕に化けた妖怪とかもありえるかな」

ありえなくはないだろう。僕が思いついた中では一番可能性が高い。

たまたま僕の姿を見たことのある妖怪が僕に化けたか。もしくは単純に僕と見た目の似た妖怪がいたか。

どちらにしろ、それらは人型の妖怪ということになる。人の形を成している妖怪はこの幻想郷では数少なく、それも総じて知能が高い。知能の低い妖怪はとも動物的で大抵獣のような姿をしているのだ。

ようは、僕が人里に帰るためにはそんな知能の高くとも強い妖怪を探さなければならぬ。

「じゃあ、もしかしてそんな妖怪がいなくならない限り、人里に入れないってことか……？」

これは先が思いやられそうだ。僕はこれからのことに頭を悩ませつつ、もう一度深い溜息を落とした。

まずは食料の調達である。

人里に帰れない以上、僕はここらに滞在しなければならぬ。完全に切り替えられたというわけではないが、生き抜くためにも、その糧となる食料が必要だ。

取り敢えず川を探せばいいだろう。

僕を含めた生き物というのは水がないと生きてはいけない。人間の体の半分以上は水なのだから、なければいずれ死んでしまう。生き物が水辺に集まるのは最早自然の摂

理なのだ。

僕は耳を澄ませて川の流れる音の方へと向かった。

探すこと数分。ようやく僕は川を見つけることが出来た。

月明かりに照らされたその川は、見ていてとても癒やされる。そんな川の周りには動物が数匹いた。水の方は結構透き通っているので魚の方も期待できる。

我ながらよくこんな良い場所を見つけれられたものだ。とにかく、喉もカラカラなので川の水を頂くとしよう。

僕は川の水を飲むために近づき、川を覗き込んで――

「ツー」

僕は驚いてとっさに勢い良く後ろに飛び退いた。

――これは、どういうことだ……？

焦って後ろを見るも、そこには誰もいない。音もしなかったし、立ち去った形跡もなかった。

聞こえるのは川の流れる音と風に揺れる草木のみ。後は自分の鼓動の音だけだ。

だからこそ、僕はこの惨劇に驚愕した。

僕はもう一度川に近づき、ビクビクしながら顔を覗きこませた。

透き通っている川の水は僕の顔をくつきりと鮮明に映した。

「これが……僕なの……？」

頭に獣特有の大きな耳を生やして、口を動かした瞬間に鋭く尖った牙が顔を出す。それは月光により鈍く光り輝いていた。

しかし、そんな白狼天狗の特徴を映しているのにも関わらずだ。

その顔はどう見ても、どこを見ても自分のものだった。

「なんで……」

そんな言葉が口からこぼれ出た。最初からおかしいと思っていた。

だがしかし、理解が出来なかった。

最初からそのことは頭の片隅に入れていた。

それもそうだろう。森から人里へ帰る時は全力ではないにしろ走っていた。普通の人間なら軽い息切れくらいなら起こるはずなのに、それがその時の僕にはなかった。

それだけではない。さつきだつて遠くの川の音を他の雑音の中から聞き分け、その場所を特定したのだ。

それを野性的な本能だと言わずしてなんとすべきか。

だがしかし、それでもそうではないと思っていた。いや、思おうとしていたと言った

方が正しいか。

誰がそんな非常識を理解出来るだろうか。少なくとも僕は絶対に理解できないし、しようとしてもしない。

普通人間から妖怪になるにはかなりの期間が必要なのだ。それも人間としての寿命が一回分は軽く過ぎてしまうくらいには。

それなのに僕は妖怪になっていた。僕の姿は紛れも無く白狼天狗になっている。しかし、それは極一部の狼が死後、長い年月をかけてなるものだ。

「そんなのに心当たりがあるわけ——」

そう口にして、ふと思いついたかのように僕は走りだした。当然のように僕の脚力は人間の時とは比べ物にならない位になっていたが、そんなことよりも今は埋めた狼の姿を確認しなかった。

しかし、いくら掘り起こしてもそこには狼はいなかった。

「……そうか」

僕はようやく理解した。

どうやらこの狼は長い年月をかけて白狼天狗となるはずの狼だったのだ。そんな狼に僕は接触し、その狼を埋めてしまった。なにが原因だったのかはわからない。でも、これだけは断言できた。

狼は僕の体を使って妖怪となったのだ。何でそうなったのかはわからない。そんなことが可能なかすらわからない。

だが実際に起きてしまっているのだから、そう言わざるを得ない。

僕は喪失感を覚えて両膝を地に落とした。もう僕は人里に入ることには出来ない。当然ながら僕を生み、育ててくれた両親に、年の離れた可愛い自慢の妹に会うことは出来ない。

後ろで僕の歩幅に合わせてようと必死に歩く妹に。

お兄ちゃんと言いながら可愛い笑顔で抱きついてくる妹に。

会えない。

「うう……うああああ!!」

僕は独りの寂しさを紛らわすように大きく叫んだ。それでもひたすらにあふれ出てくる涙だけはどうすることも出来なかった。

第三話 妖怪との出会い

人目も、妖怪の目もくれずに泣き続けた。どれくらい泣いていたかなんて覚えていない。だからといって泣かないなんてことは、僕には出来なかった。

人間が妖怪になったなんて、そんな事実を唐突に突きつけられて、はいそうですかと受け止められるわけがない。

しかし、当然こんなことをしていても人間に戻ることはない。これからのことを考えよう。しかし精神的に疲れきった頭は思うように働いてはくれない。

「いつそ妖怪としてこれから生きていこうか……」

疲弊しきった頭でそんなことを考える。しかし、いやいやと頭を振った。

どう考えても無理だ。今まで人間だった僕が妖怪として人間を食べるだなんてことを、本能に任せるようなことを出来るはずがない。

じゃあどうすれば……

「もう無理だよ……」

涙とともにぽつりぽつりと弱音がこぼれ出す。

「もういつそ……死んでしまおうか……」

そうだ、きつとそれがいい。このまま妖怪として人の生を奪い自らの糧にして生をつなぐくらいなら、人間として妖怪に殺されるよっぽどマシだ。

「お兄ちゃん、死にたいの?」

ならば、そう思つて立ち上がる瞬間、近くから幼い声が聞こえた。僕は驚いてバツと顔をあげる。

そこには緑色の髪を肩ほどに揃えた少女がいた。年齢は十歳前後だろうか? 黒色の帽子にリボンをあしらつたものを頭に被り、不思議そうな顔をしている少女は、しかしその胸元にある第三の瞳だけが僕を見つめて放さない。

「どうしたの?」

その発言と同時に揺れる第三の目が、目の前の少女を悟り妖怪だと物語っている。人生ならぬ妖怪生の開始早々に凄い妖怪に見つかったものだと、僕は内心驚愕の声をあげた。

「……」

「……」

沈黙が続く。出方を見ているのだろうか。だがしかし、何もしてこないのなら好都合である。もしもいきなり妖怪としての力を行使してきょうものなら、力の使い方を何一つ知らない僕では叶いっこないのだから。

「……ねえ」

長きに渡る沈黙は結局少女の方が断ち切った。

「お話、しない？」

しかし、予想外の展開で。

……何を言っているんだろうか。何か裏でもあるのだろうか。

下級妖怪である僕に対して油断を誘うだなんて行為を悟り妖怪がするだなんて考えられないが、どうしてもそう考えてしまう。

「裏なんて無いよ？」

……心を読まれた。

悟り妖怪が心を読めるということは周知の事実なわけで、人間の中で色んな考えがあるが僕は少数派の意見でそれに関して恐怖を抱くようなことはなかった。

とは言え警戒を解くわけにはいかず、一応いつでも逃げれるような準備だけは怠らない。

「そっか……怖くない……のかぁ……」

また心を読んでいたのである。そう呟いた後、少女は安心したようにそつと微笑んだ。それは到底妖怪とは思えない。心を読めない僕でもわかる、優しく暖かな笑顔だった。

僕は理解した。そして大きな木の方を指差した。

「じゃあ、あそこに座って話そうか」

「……っ！ うんっ！」

目の前の少女は緑髪を揺らしながら大きく頷いた。

第四話 似た者同士

その後、僕たちはいろんな話をした。

緑髪の少女——古明地こいしと名乗った少女は飽きることなく、僕に話をした。

まずは簡単な自己紹介を。

次に、最近の趣味や面白かったこと、楽しかったこと、そして悲しかったこと。

いろんなことを僕に、それは楽しそうに聞かせてくれた。それはもう、聞いているこちらでも楽しくなってくるほどに。

「——ねえ、聞いてるの?」

「ああ、ごめんごめん、聞いてるよ」

なぜか不安げに僕の顔を覗くこいしに、心配いらないと笑い返す。

しかしこいしは未だ浮かない表情を続ける。どうしたのだろうか、僕は疑問に思つてこいしの顔を伺う。

ぽつりと、こいしは言った。

「私は……ずっと一人だったの」

さっきまでの笑顔がウソだったかのように、今のこいしの表情は悲しそうだった。

「一人だった？」

僕は聞き返す。

こいしの話にはよく姉の存在が出てきていた。

仲が悪いのだろうか？ そう聞いてみたが、こいしは静かに首を横に振った。

「お姉ちゃんとは仲がいい、と思う……」

「思うって、それはまた曖昧な」

「お姉ちゃんはいつも地底で忙しそうにしてるの……。私は覚り妖怪だから人間からも妖怪からも避けられ続けて、でもお姉ちゃんに心配かけたくなかったから……」

うまくまとまらない思いを、ゆっくりとこいしは溶かしていく。

でも、こいしは言葉が続けた。

「楓お兄ちゃんだけは違った……こうやって話を聞いてくれるし、会った時だって怖くないって思ってくれた。本当に嬉しかった」

そう言って、こいしは少し苦しうに笑顔を浮かべた。

「だから、ありがとう！」

その感謝は、何に対する感謝だったのだろうか。

自分の話を聞いてくれたことか。

自分を怖がらなかったことか。

いや、もしかしたらこれは僕に対してなんかじゃなかったのかもしれない。

そして、そんな考えもこいしはお見通しなのだろう。

でも、こいしは何も言わなかった。

その第三の目で、全てを知ったはずのこいしは、しかし依然として作られた笑顔を貼り付けたまま。

「なんだろう……似た者同士だったのかな？」

僕は笑いながら言った。

こいしはこれから話すことも、すでにわかっている。

でも、僕は言葉を止めなかった。

「こいしならもうわかっていると思うけど、僕は元々人間だったんだよ」

こいしは肩をぴくりと動かす。僕は話を続ける。

「妖怪になって、人里に帰れなくなった。家族にも友達にも会えなくなつてさ、当然妖怪の中に友達は一人もいない。こいしとはちよつと経緯が違うけど、僕も一人になつちやつたんだ」

言っていて凄く辛くなる。家族のこと、妹のことや仲のよかつた友達のこと。思い出しては消えて、それを繰り返す僕の頭の中。

そんな僕にこいしが手を伸ばす。

僕はその手を、震える両手で包んだ。

目の前の少女は先天的なもの。

そして僕は後天的なもの。

僕たちには、何も無い。

「だからこいしが来てくれて本当によかつた。こいしが来てくれないなかつたら、僕は死ぬことも生きることでもできずに彷徨っていたと思う……」

今では妖怪だが、元は人間だ。

そんな存在が、そう簡単に死を受け入れるはずがないのだ。

とは言っても、元人間が妖怪として生きていくことなんてできるわけがない。

だから、ひと呼吸おいて僕は笑みを作つて言った。

「ありがとね」

僕その感謝の声に、こいしは笑顔で応えてくれた。

「うん！　ありがとう、お兄ちゃん！」

会話はこのあとも続いた。先ほどよりも距離が縮まった僕たちは自然と寄り添うような形になり、何も無い二人は時が経つのも忘れ、楽しく語り合った。

今は会えない妹の姿を、少女に幻視しながら。